昭和46年4月25日発行通巻7号(毎日曜日発行) 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日＝ラルース

4/25
220円
7

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

刊行のことば

1970年代の世界は，科学技術の異常な進歩と豊かな経済発展をとげた半面，人間の幸福とは何かを，あらためて問い直すことを余儀なくされています。この地球上の自然は，現代文明の生んだ公害のために破壊されようとし，動植物はかれらの生息する環境を失いつつあります。動物の一員である人類の運命もまた，この自然環境の崩壊に左右されるでしょう。

この時にあたって，失われようとしている自然と，危機に臨んでいる動物界を，いま一度ふりかえって，認識を新たにすることは，人類にとって無限の意義をもつものと信じます。

生きている動物界の実態を明らかにし，自然への親しみを呼びおこすことは，また人類の未来についての教訓ともなりましょう。

朝日新聞社が，フランスのラルース社と提携して「朝日＝ラルース　世界動物百科」を発刊するのは何よりもこのためであります。

本誌は現在この地球上に生きている動物の生態を，全世界から選んだもっとも美しいカラー写真でとらえながら，動物のなかでいちばん人間と縁の近い哺乳（ほにゅう）類，それも人間の〝親類〟であるサルからはじめ，鳥類，爬虫（はちゅう）類，両生類，魚類，昆虫（こんちゅう）を含む無脊椎（むせきつい）動物の順で紹介していきます。

内容は，高い学問的水準を保ちながら，青少年にも親しめる平易な表現で，生きた動物の姿を興味深く伝えることにつとめました。

とくに日本の読者のためには『私たちの仲間』のページを添えて〝動物週刊誌〟としての内容の充実をはかり，世界と日本の動物界のニュースや話題をおさめました。また日本の第一線動物学者の手により，カラーページを補完する解説と注をつけ，あるいは日本の動物についてのより詳細な紹介を行ないました。

本誌はアイウエオ順に並べるこれまでの〝引く百科〟の観念を大きく打破しました。192 週にわたって楽しく読み進んでいくうちに，おのずから動物についての百科的知識が集積されていく〝読む百科〟として，いつまでも読者の皆さんに親しまれることを期待してやみません。

世界動物百科　第 7 号　4月25日　目次

カラーページ

表紙　コモンマーモセット　Ph. Visage－Jacana
表3　**ギャラリー**　魔よけ獅子像　水尾比呂志

監修　伊谷純一郎（京都大学理学部助教授）
翻訳　佐藤正之（独協大学講師）

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または原地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2—3　〒100 TEL 03—212—0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３—３　〒530 TEL 06—231—0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津　〒802 TEL 093—53—1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１—３—３　〒460 TEL 052—231—8131

次号予告

4月21日発売



世界動物百科
8号　5／2

カラーページ

□**原猿亜目**
□**メガネザル科**　セレベスメガネザル
□**ロリス科**　オオガラゴ　スレンダーロリス
□**アイアイ科**
□**インドリ科**
□**キツネザル科**
□**キツネザル亜科**　ワオキツネザル
□**コガタキツネザル亜科**　ファナー

私たちの仲間

地震に先だつ魚の異状　末廣恭雄
ついにどんべえを　ヒグマと２人のイノシシ　7　畑　正憲
哺乳類のキミとボク　もうひとつの世界　5　G．5プラス1
四つの葡萄色の瞳　6　江藤　淳
漢字のふるさと　5　藤堂明保
動物写真のポイント　8　田中光常
くずれ落ちる巨ゾウ　野生動物こんにちは　5
草食動物と〝塩〟　大森昭一郎

私たちの仲間

7号………4月25日

トピックス

オオハクチョウ移住作戦

富山市栃谷の大沢池が基盤整備作業のため今冬限りでつぶされることになり，この池を毎年訪れていたオオハクチョウが，はたして飛来するかどうか危ぶまれていた。（本誌第1号既報）

その後，18羽が飛来したものの，警戒心の強いオオハクチョウは，周囲の環境の変化におちつかず，〝安住の池〟を求めて県内をあちこち移動していた。

これでは，昭和39年以来毎年飛来していたのにかわいそうだと，地元の白鳥保護対策委員会（会長大沢梅作）では，県治山課の指導でわざと大沢池の水位をさげ，まき餌も行なわずに，他の池へ定着させる作戦をとってきた。

このため，オオハクチョウも大沢池をあきらめ，ついに寄りつかなくなった。そして，大沢池から約1キロ離れた小杉町のかも池が気に入ったのか，かたまって姿を見せるようになった。

かも池は県道小杉―八尾線から約200メートル離れ，大沢池（1.8ヘクタール）よりひとまわり大きく，水草も豊富でハクチョウの池としては絶好の池だ。

オオハクチョウは3月の末にシベリアに帰ってしまうが，県では小杉町民になるべく，かも池に近づかないように，また，来年飛来したら餌づけするよう協力を要請している。

この移住作戦，来年にならなければ結果は不明だが，成功させたいものだ。■



〝おさな妻〟ゴリラ

ロミイ（写真）は5歳，イギリスのチェシントン動物園にいるゴリラの未亡人です。先日，ロミイの夫が死んでから，憂うつな毎日を送っていました。食欲もなく，何にたいしてもなげやりで，ときには凶暴なうなり声を出したり，一日じゅうごろごろするばかりだったり——。

その彼女がある日，目を輝かせて観客のほうに手をさしのべたのです。飼育係が見ると，それは1人の少女が胸に抱いた白いウサギの人形でした。さっそく，飼育係がそのゴム製の人形を買い求めて，ロミイに与えました。

握るとキュウキュウ鳴るこの人形をもらったロミイは，飛びあがって喜びました。

それからのロミイの熱愛ぶりといったらありません。食事のときはもちろん，どこにいくにも人形を手放しません。口のなかに入れたり，肩と首の間にはさんだり。だけどいちばん気に入っているのは，人形に向かっておしゃべりするときのようです。ロミイが語りかけながら手のなかの人形を握ると，人形がキュッキュッとこたえるからでしょう。

そしてロミイは，夫を失った悲しみを完全に忘れてしまったようです。もっともゴリラの5歳というと，ハイティーンのお嬢さんぐらいですから，人形に夢中になるのは無理もないかもしれません。

日本でも動物園の動物たちが，ノイローゼだなどといわれてますが，解決法は案外こんな簡単なところにあるのかもしれません。■

誕生　たんじょう　誕生

〈その1〉　横浜・野毛山動物園で，日本ではじめてナマケグマの赤ちゃん2頭が生まれた。

インドやセイロン島などに生息しているナマケグマは，はちみつが好物なことからハニー・ベアとも呼ばれているが，日本には現在12頭しかいない珍獣だ。

野生を離れた親は赤ちゃんを育てることを知らないので，飼育係が親もとから引き取って保育している。

生まれたのは雄と雌の2頭で，体重は1.9キロ，まっ黒なからだで鼻をクンクンならしながら，1回150ccのはちみつ入りミルクを飲んでいる。公開されるのは5月初旬になる予定だ。■

〈その2〉　国際結婚で話題をまいた神戸市王子動物園のヨーロッパ産コウノトリ科のシュバシコウ（雌・17歳）と中国産コウノトリ（雄・7歳）の夫婦が待望の卵を生んだ。

雌は昭和30年2月に来園，最近2年間に24個の卵を生んだが，いずれも無精卵だった。結婚して卵を生んだのは日本でもはじめてだけに，文字どおり〝金の卵〟だ。

卵の大きさは直径7.5センチ，重さ120グラムで，高さ1.8メートルの木の枝につくった巣の中に産み落としてあった。

特別天然記念物に指定されている日本産コウノトリは，兵庫県豊岡市の2羽と野生の1羽，計3羽がいるだけなので，同園ではなんとか孵化しようとはりきっている。■

〈その3〉　鹿児島県指宿郡山川町・長崎鼻パーキングガーデンで，ワオ（輪尾）キツネザルがふたごを生んだ。

ワオキツネザルはマダガスカル島にだけ生息するサルで，灰色の長い尾に黒い輪が等間隔にはいっており，顔つきはキツネに似ている。

日本では伊東など数か所の動物園でしか飼育されていないので，今回の誕生は貴重だ。

ふたごの赤ちゃんはリスぐらいの大きさで，しっぽにはすでに黒い輪がはいっている。産後で母ザルの気がたっているため飼育係も近づけず，性別や体重はわからないが，2匹とも母ザルの胸にすがりついて元気に乳を吸っている。■

〈その4〉　高松市の栗林公園動物園で，ゴリラの赤ちゃんが生まれた。

昨年，京都市動物園で誕生して以来，日本で2度めの誕生だ。

ゴリラの出産は非常に珍しいものだが，さらに今回の誕生が注目をあつめているのは，赤ちゃんを生んだ母ゴリラに，父ゴリラがやさしい心づかいをみせながら，両親で保育にあたっていることだ。

これまでの保育は，ほとんどが誕生と同時に飼育係の手に移したもので，こうした栗林公園動物園の例は，いままでに海外でもない。■

〈その5〉　大阪・天王寺動物園はこのところちょっとしたベビーラッシュだ。

第1号には1月15日にオリックス（アフリカにすむカモシカの一種で黒いシマ模様と長い角が特徴）の赤ちゃん（雄）が誕生。つづいてカンガルーの赤ちゃんが3頭誕生しているのを確認。

さらにペンギン，ライオン，トラ，カモシカ，シマウマ，ピューマ，サル，ハクチョウ，クジャクなどの赤ちゃんが続続と誕生した。このあと，キリンが7月，カバが秋に出産の予定で，サイにもそのきざしがある。

ただし，せっかく誕生しても，親子の仲がうまくいかなかったり，仲間はじきにされることが多いのが，飼育係の悩みだという。■

続 皇居の動物たち

入江相政



春の陽を浴びながら，皇居の蛤濠に浮かぶカモの群れ

秋も深くなってくると，カモの類が北の国から飛んでくる。群れをつくってくる鳥だから，1羽，2羽というような具合ではなく，ある日気がつくと，10羽も20羽も来ていたというようなものである。

日本に飛んでくる経路は，サハリン，北海道，東北というのもあるし，朝鮮半島を経てのもあるらしいが，いずれにしてもシベリアからである。

シベリアのタイムィル半島というようなところは，極北，極寒の地だが，夏がくると，禾本科植物がいっぺんに花咲き実る。あの辺の植物は，夏がきわめて短いことを知っているからである。カモの類はこれをたらふく食べて卵を産み，雛をかえし，育て，秋がくるとつれだって日本に渡る。

御所の堀はカモにとって，東京中で，日本中で，一番安全なところであろう。すぐそばを，あんまり多くの車が通る所は避けているが，内堀はもとより，半蔵門から桜田門までのあの深い堀などには，浮いたり岸に並んだりしている。昼間はそのようにしていて，夜になると江戸川とか葛飾とか，さらにもっと遠くまでも飛んでえさをとってくる。

マガモ，コガモ，オナガガモ，ヒドリガモ，あまり大きくは渡らないカルガモ，いろいろの種類が仲よく，時には仲悪く集まっている。仲悪く，というのは，強かったり，意地が悪かったりして，たがいにいっしょにいるのを好まない取りあわせもあるようだ。

それにしても万葉集にも詠まれているので，日本人が注意するようになってからでも，1200～1300年にもなるので，1200～1300回というもの，この鳥はシベリアへ飛び，またシベリアから渡ってきていることになる。

吹上御苑には大池という池があるが，戦争のおわりごろ水がなくなり，長い間草原になっていた。10年前，陛下が還暦をお迎えになったころ，工夫して簡単な方法でもとの池になった。大小のコイも放されて一応ととのったが，冬になってもカモは来てくれない。カモは草原が急に池になったことに，なにか恐怖を感じたとみえて，陛下のお望みのようには降りてくれない。水面はただ空しく光るだけだった。

陛下はこれを淋しくお思いになって，アヒルを10羽ほどお放しになった。それでもカモはまだ疑って降りない。けれどもしんぼう強くお待ちになった甲斐があって，2，3か月したら，ほんのわずかばかり降りて浮いてくれた。大変お喜びになったが，降りはじめのカモたちは，遠くのほうにちょっとでも影が見えれば，すぐどこかへ飛んでいってしまった。

このごろはもうすっかり気を許すようになり，いつのまにかカモばかりでなくオシドリも加わって，戦前と変わらない情景になった。

太田道灌の名のついている道灌堀という堀がある。皇后さまの御養蚕所の下になっているし，御陪食などがよく催される，新宮殿の連翠というお部屋からも見おろされる堀である。カモもたくさんいるし，スッポンもカメも，年経たナマズもいる。冬は薄い氷の下の泥の上にかすかに動くフナが見えるし，このフナたちはまた，産卵の前にはいくつもの群れをつくって泳ぐ。岸の近くには黒いメダカが集まる。

ここには長年カワセミがいた。フナやコイなどをじっとねらって岸の棒ぐいなどにとまっていた。東京近辺からこの鳥が姿を消してからも，ここのは残っていたので，鳥類の研究家も，道灌堀のカワセミとして登録していた。ここを通りかかると，私を恐れてか，あるいは翡翠の羽の色を誇ろうとしてか，きわめて速く，水面すれすれに飛んで，対岸に移ったものだった。この2，3年来，これもまた見られなくなってしまった。

11月もなかばを過ぎて，だんだん寒くなりかかるころ，三宅坂のあたりの堀に，何千という数を知らないユリカモメの大群がくる。在原業平が「名にし負わばいざこととわん」と詠んだミヤコドリというのはこの鳥のこと。海の荒れた日にだけくるのかと思ったこともあったが，どうも必ずしもそうでもないらしい。

初冬とはいえ陽ざしは豊か，そういう陽を浴びつつ乱舞したり，そうかと思うとスロープの枯れ芝の上に，粉雪のように降りたりする。対岸の尾崎記念館の側から写真機を構えている人たち。今では初冬の東京名物の1つになった。

冬になるとムクドリの大群が，皇居の空を舞ったり，空高くそびえ立つイチョウの木のてっぺんにとまったりする。このうちのどれだけかは，陛下の巣箱から巣立ったものにちがいない。この鳥は植物質も食べるが，好んで虫を食べる。いったいどれだけの害虫がこの連中に食べられたものか。

ツバメは少なくなったが，ホトトギスはまだ鳴いてくれる。ジョウビタキやセグロセキレイやツグミもよく見かけるし，このごろはどうかしらないが，以前にはメボソムシクイみたいな高山の鳥までが一時立ち寄ってくれたこともある。そうかと思うとノスリが高い木のてっぺんから睥睨して，多くの鳥をおびえさせる。このごろは少なくなったようだが，ひところは年間70種の鳥を数えたのである。

昭和42年の4月2日の昼ごろ。吹上御所にいた私の所に，陛下は電話で「いまヤツガシラがいるから急いで」と知らせてくださった。まるでイモのような名だが，「急いで」と教えていただいたところからいって，イモではないらしい。かけていったら鳥類図鑑が開かれたままになっていて，陛下はいらっしゃらなかった。

正倉院の御物の模様にもあるこの大陸の鳥，どうしてここに迷い込んだか。それから4日間吹上のお庭に滞在して，それっきりどこかへいった。陛下もお待ちに



間見谷さんはクマを7頭飼っているが，皆が皆ヒグマではない。青森から連れてこられたツキノワグマもいる。

これは，本土へ出稼ぎにいった人が連れて帰ったものである。ヒグマ同様，当歳の間は危険がないしかわいいし，土産物屋の店先で飼われているが，やがて大きくなり過ぎるため売りに出されるのである。

3歳にもなると，動物園に欠員があるか，よほどの物好きに引き取られるかしない限り，死を覚悟しなければならない。さんざ利用され，それまで仲間だと思っていた人間に殺されてしまう。こうしてこれまで，クマと人の間に折角芽生え始めた友情が，どれほど無残につみとられてきたことか。

「おやじがとっても動物好きだったから，子供の頃からヒグマを見て育った……」

と，間見谷さんは昔を思い出してくれた。

当時の北海道は，現在とは比べものにならない位自然が豊かで，ヒグマの数も多かった。今の阿寒や上川の町の辺りにも出没したし，自然を引き裂く道路は貫通していなかった。

まだ，穴グマ撃ちのアイヌも何人か残っていた。彼らは父祖代々ヒグマが冬眠する穴を伝えられていて，厳寒の山に入り，眠っているヒグマを撃つ。1人の猟師が，一冬に10頭以上仕止めることも珍しくなかったそうだ。「でも，本当に眠っているわけじゃないからな」

と，間見谷さんは思い出し笑いをした。

今，子供を産んでくれているハナコを初めて冬眠させた時，彼は心配で心配で仕事が手につかなかった。

「……あれは正月元旦のことだったな

ヒグマと2人のイノシシ 6

ハナコとタロー

畑 正憲

あ。たまりかねて，そっとオリの中へ入ってみた。すると，藁の蒲団からのこのこ起きてきたっけが，またごろりと寝てしまった。ハナコ，そう呼んだけど，とろんとした目で見上げているだけだった。……あ，この藁だけどね，いよいよという時たくさん入れてやる。と，口でくわえたり手で叩いたりして，寝床を作り始める。そうするとすぐだね，横になって眠るのは」

「餌があっても食べないのでしょうね」

「そうそう。元旦だったから，餅を食べさせようと思っていた。それも好物のあんこを，外側にたっぷりまぶして」

「あんこですって？」

と僕は声をはずませ，

「やっぱり甘いものが……」

「好きなんだよ。だがハナコのやつ，鼻をひくつかせていたが，しぶしぶ，ほんとに大儀そうにやっこらさと起きてきて，ちょっとだけ舐めてまた寝ちまったけが。食べないと叱られる……そんな感じだった」

その場面が，僕にははっきり見えた。

わざわざ温めたあんこをまぶした餅を持って，訪れるべきかどうか居間で迷う間見谷さん——。その姿を家族がからかい，彼は怒ったふりをして外へ出る。

元旦の空は真上で淡青に澄み，大雪山と接する辺りで純白になって山を隠している。

「いい朝だ」

彼は太い溜息をついて，雪を靴底で鳴らしてハナコの部屋へと向かう。

ハナコがお義理にちょっとだけ舐めて寝てしまった姿を見た時，彼のからだは熱くなったに違いない。

ああ，そう想像しただけで，僕はぶるぶるっと身震いをした。どんなにかかわいく，どんなにかいじらしかったことだろう。

心から好きでないものには，動物は飼い続けられない。息子や娘を育てるように，いや時によってはそれ以上に手がかかるし，どうしてこんなことをしなければ，と思うことだってある。

が，それでも飼うのは，こういう瞬間があるからである。何ともいえぬ不思議な衝動がからだを走り抜け，息がつまる位相手を抱きしめたくなる。

ハナコにはきょうだいがいた。弟だか兄だかわからないが，猟師の手で里に運ばれた時には同じ大きさの牡が一緒だった。人手から人手へと渡ってきたので，正確なことは憶えていないそうだが，ずいぶんと長い間ミルクを与えていたというから，穴グマ撃ちのアイヌにつかまったものではなかったろうか。

ヒグマは普通，牡と牝の2子出産する。まれには1子とか，3子，4子の例もあるそうだ。ハナコの場合には，ごく平凡な，それだけにごく健全なお産だったのだろう。

牡の方は，違う飼い主に買われていった。そしてすくすくと育ち，観光客に愛敬をふりまいたりしていたが，今はいない。ご多聞にもれず，殺されてしまったのである。

ハナコの夫はタロー。1つ年下のやや小さめの牡である。

からだが小さいのにはわけがある。

4年ほど前，何者かのために，横腹を傷つけられてしまったからである。その傷は，直径3センチ位の大きなもので，何か鋭い槍のようなもので突かれたと推定された。

その頃，間見谷さん一家は旭川の市内に住んでいたが，人家が近くにあったり土地が狭かったりしたので，動物を飼うには不便だった。そこで，人里離れたこの上川のはずれに移転しようと，土地を下見にきた際の事故だった。

「ヒグマが怖い，ヒグマを飼うのは不都合だ，そう反対しておれを刺すのならまだわかる……だが，オリの中の動物を，刃物で刺すなんて」

と間見谷さんは絶句した。

なんと卑劣で，残虐な人間がいるものではないか。この傷のため，タローは2年間苦しんだ。

傷を受けた最初の夏，化膿した部分へ水鉄砲でヨードチンキを注ぎ，日に1000円近い抗生物質を与えた。その傷は，冬の間は小康を得たが，次の夏にはまたぶり返し，前よりももっとひどくなった。

病気の話になると，奥さんのワカさんが乗り出してきて，

「何度も，もう駄目だと思いました。傷をうけた方のからだ半分が，ふだんの倍位に腫れてしまったのです。もうクマじゃなくってフグちょうちんみたいでした。オリの中にうずくまって，ただうとうとするばかり……不憫で，治るものなら何もいらないと思いました」

「食事なんか，大変だったでしょうね」

「ええ。とにかく栄養をつけさせねばと，肉を入れたおかゆを作ってみたり，牛乳に砂糖を入れて与えたり，必死でした。でも強いものですね。持ち直して元気になったのですから」

だからタローは，並の牡より小さい。ちょうど成長期の最後の年に重傷を負ったので牝より小振りである。

それにしてもすごい生命力である。野生動物には，人間にはすでにない災いからの回復力，神秘的な底力があるに違いない。

そのタローとハナコの子供である。昨年のタンコにしろ，今年生まれているまだ名なしの子グマにしろ，間見谷さん夫婦には血をわけた子供同様にかわいいようだった。

そのタンコには面会させて貰った。

冬眠中のオリにつもった雪をかきわけ，

「おうい，タンコ元気かい」

と間見谷さんが呼びかけると，中で生きものが動く気配がした。

「さあ，どうぞ，この穴から」

「はあ」

目を近づけたが何も見えない。おかしいぞとなおも目をこらすと，突然，すごい鼻息を吹きかけられてしまった。見えないはずである。穴は向こうから，タンコが顔で隠していたのであった。

フオーッ。

獣くさい熟れた息にまじって，粘っこい飛沫がとんできた。僕は接吻せんばかりの距離でタンコと向かいあいながら，タローが死んでいたら決して生まれなかった生命について，生きているものから生きているものへ伝えられる生命について，しきりに想いを馳せていた。■



おうい，元気かい」 間見谷さんは，つもった雪をかきわけて，オリの中に呼びかける．

なっているが，その後は二度と来てくれない。もともと来たのが不思議なので，来ないのがあたりまえともいえよう。

このごろ公開されて東御苑と呼ばれているところから，吹上御苑のほうに向かって下るだらだら坂がある。この坂はキツネ坂というのだが，どうしてこんな名なのか。明治以後はキツネがいたとも聞かないが，徳川時代の話だろうかとものに書いたら，明治にいたと教えてくれた人があったし，さらに大正13年に見たという人も現われた。

竹橋の辺から見える書陵部の建物，戦前は図書寮といったが，あれの建築工事などのためにいなくなったのではないかという。そうすれば昭和のごくはじめごろまではいたのかもしれない。そのキツネはキジと同じく，武蔵野にすんでいたのが，この城に封じ込められたものにちがいない。番いらしいのが子をつれてあるいていたのを見たこともあったそうだ。

生物学御研究所というのは半蔵門に近いところにあるのだが，その辺で昭和になってからタヌキを見たという人もある。今はもうどっちもいないことだし，昔話に過ぎないのだが，外ではとっくの昔に姿を消したこれらが，ここにはわりにあとまで残っていたことにはなる。

1メートル以上もある太く長いアオダイショウが，吹上の水たまりで死んでいるのを見たこともあるし，今でも堀のハクチョウの卵を呑もうとして，石垣のすきまからねらっているのを見るのはそんなに珍しいことでもない。

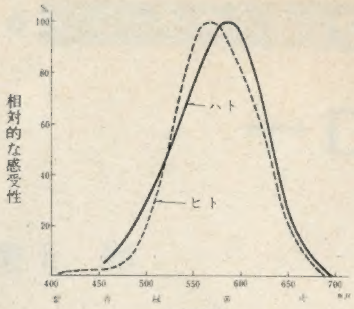
こういうわけだからか，紅葉山にはまっ黒な小さいヒキガエルが，足の踏み場もないほどいっぱいになった年もあったが，大きいカエルをあんまり見かけないのは，みんなアオダイショウやらシマヘビに呑まれてしまうためか。ヘビはこの2種類だけ。皇居でヤマカガシを見た記憶はどうもないようである。■

（侍従長）

もうひとつの世界
4

鳥の目でながめた景色

グループ・5プラス1



ハトとヒトの色感グラフ

bird's-eye view ということばがある。鳥の目でながめた景色ということであるが，鳥とは空を飛ぶものであるということから，空からながめた景色，全景図，といった意味で使われている。日本語では鳥瞰図といわれており，観光案内図などによく使われている。

しかし，よく考えてみれば，全景図というときに空からながめているのは，実は人間の目であって，鳥の目ではないことがわかるだろう。

そのような図は aeroview 空瞰図ではあっても，「鳥」瞰図であるかどうかは別の話である。鳥の目に，景色がどのように映っているのかはわかっていない。

人間はどうしても，人間中心に考えてしまいやすく，一方では，鳥と人間が違っているのはあたりまえだと思っているくせに，他方では鳥もこの世界を人間とまったく同じ目でながめていると，頭から決めてかかっているわけだ。そして，bird's-eye view ということばをそのまますなおに受け取れば，鳥の目でながめた景色，すなわち鳥の目に映ったこの世界，という意味であり，なにも空からながめた景色とは限らないことになる。

それでは，ほんとうの bird's-eye view とは，どのようなものだろうか。鳥の目には，この世界はどのように映っているのか。要するに，鳥の世界とは，どのような世界なのだろうか。この問いにはいろいろな意味があるが，ここではそれを文字どおりにとって，鳥の視覚がどのようなものかを述べてみよう。

鳥目ということばがある。鳥は夜には目が見えないとふつうには考えられているために，夜盲症のことを鳥目というわけである。これは，どのくらい弱い光まで感ずることができるか，という能力の問題だが，鳥はほんとうに夜には目が見えないのだろうか。夜，林のなかを明かりをつけずに歩いていると，ときどき近くのやぶのなかから小鳥が飛び立つことがある。そのような場合に，空をすかすようにしてよく見てみると，小鳥は木の枝にぶつかることもなく，うまく枝の間を抜けて逃げていく。そして，もし目が見えないのであれば，再び眠るためにとまる枝を見ることができないことになり，そのまま一晩じゅう飛びつづけていなければならないはずだが，実際にはまもなく茂みに飛びこんで，静かになってしまう。

少なくともこうした小鳥は，人間が明かりなしで歩けるくらいの暗さでも，木の枝を見ることができる。決して「鳥目」ではない。ただし，映画館にはいったときに経験するように，明るいところから暗いところにはいったときに，人間では，約10分もすれば目がなれて，あたりが見えるようになるが，鳥では，それに1時間以上も必要なのである。このことが，鳥目ということばを生む原因になったのではないだろうか。

明るいところで，鳥がどのくらいはっきりと物を見ることができるのか，つまり，どのくらい近い2点を別々の点として見分けることができるのかは，なかなか調べにくい問題だ。高空を飛びながら，地上の獲物を目でさがすワシタカ類を見ると，鳥はずいぶん目がいいのだろうとだれでも思う。チゴハヤブサは，人間より2倍も遠くから，獲物であるトンボが飛んでいるのを見つけることができる。

一般に鳥の網膜の感覚細胞（錐体）は，非常に密につまっているので——これは写真でいえばフィルムの感光粒子が細かいことに相当する——人間よりもよく見えるとされている。人間では，もっとも密な部分で，1平方ミリ当たり16万の錐体があるが，スズメでは40万，ノスリでは100万もの錐体があり，かなりよく見えるものと思われる。

しかし，別の報告によると，人間は角度にして30～40秒を見分けることができるのに多くの小鳥は1分半（1/40度）まで，チゴハヤブサは約20秒（1/180度）までを見分けることができるとされている。人間の視力だと，理論上は約3000メートルの上空から，ウシやウマがいるのがわかる（もちろんウシなのかウマなのかはわからない）程度だ。それならば，ワシタカ類とそう違うとも思われない。

どうも鳥の視力は，人間と同じか，少しよいという程度のもののようだ。ただし，動いているものをよく見ることができるという点では，鳥は人間よりも数段上のようであり，これが鳥は目がいいと思わせる理由の1つである。

一方，色に関しては，鳥は青緑色盲だといわれたこともあったが，それは実験の解釈の誤りであって，たとえばハトでは，人間と同じ波長の範囲の色をすべて感ずる。しかし，昆虫（こんちゅう）で知られているように，紫外線や赤外線を感ずるということはない。また，鳥は波長の違う2色を人間とほとんど同様に見分けることができる。

こうしてみると，鳥の視覚はすべての点で人間とよく似ていることがわかる。一応文句をつけてはみたのだが，実は bird's-eye view は空から見おろせる点にだけ（飛行機は別）人間との違いがあることになる。■ （U）

四つの葡萄色の瞳 5

この海獣のごときもの

江藤 淳

コッカーの，とくに黒のコッカー・スパニエルのかたちには，どこかオットセイやアザラシに似ているようなところがある。だから，雑誌のグラビアなどで，この手合いの海獣にお目にかかると，私はアニイに出逢ったような気持がして，愉快でならなくなる。

ついこのあいだも，「週刊世界動物百科」の創刊号が届いたので，ははあ，出たな，とページを開いてみたら，カリフォルニア・アシカの群れの見事なカラー写真が出て来て，嬉しくなった。そこで，アニイを呼んで，

「ホレ，お前の親類がいっぱいいるじゃないか」

というと，グウーッというような声を出して匂いを嗅ぎ，やおら正面に映っているアシカの親分らしいのの顔を，ベロベロなめ出したのには恐れ入った。やはりアニイにも，自分に似ている動物は，わかるものらしい。

ところで，アシカやアザラシとコッカー・スパニエルが似ているのは，単なる偶然ではなさそうである。というのは，コッカーがもともと猟犬で，それも沼地や沢で鳥射ちにつかう，いわゆるウオーター・ドッグだからだ。ダーキイやアニイはアメリカン・コッカーで，愛玩用に小型につくられているが，本家のイングリッシュ・コッカーは身体がひとまわり大きく，ちょっとセッターを小型にしたような，いかにも猟犬らしいイヌである。

しかし，ダーキイもそうだったが，アニイはウオーター・ドッグだというのに，風呂が大嫌いで，毎回ひどく手こずらされる。毛にお湯をかけてやると，ペタリと身体にはりついて，羽根をむしったニワトリのような掛け値なしの体型があらわれ，ははあ，案外脚が細いものだな，と眺めていたりすると，癇癪をおこしてガ，ガーッと吠える。

「なんだ，その態度は。おとなしくしなさいッ」と怒鳴りつけて，有無をいわせずシャンプーをこすりつけて，ゴシゴシと洗う。長い毛から墨汁のような水が流れ，こんなに汚いやつと一緒に寝たりしているのだから，不潔といえば不潔な話だと思っているうちに，またアニイは，ガ，ガーッとやる。

今度は一発頭をコツンとやっておいて，専用の古バスタオルで身体を拭いてやる。3枚ぐらいつかっても，それだけで乾くものではないから，ハンド・ドライヤーをつかいたいのだが，これがまた大嫌いときている。

ダーキイは優しいイヌで，ドライヤーをかけてやると眼を細めてうれしがり，身体をすりよせて来たものだった。ところがアニイは，辺見マリではないが，

「やめてッ」，とばかり素ッ飛び出して行き，狭いマンションのなかを，斜めにものすごいいきおいで疾走するのである。

寝室にしている和室から居間の洋室を駈けぬけて，私の書斎の和室にとびこみ，畳の上にザ，ザーッと爪で制動をかける。と見るまに，くるりと反転して，書斎から洋室を走りぬけ，黒い弾丸と化して今度は寝室の畳で制動をかける。おかげで私の住居では，畳はせっかく替えても，ひと月とはもたないのである。■



サバンナヒヒ

Papio cynocephalus

サバンナヒヒは，地上生活をするサルで，エジプトから中央・東アフリカの大部分にわたる地域に分布し，群れをつくって生活している。

サバンナヒヒたちは，毎日陽気に，えさを求めて暮らしている。ときおり襲ってくるヒョウをのぞいて，かれらを悩ますものはまったくない。現地人は，かれらになんの関心も示さず，ときたまその子どもを捕えて，ペットとして育てるくらいのものである。

ヒヒたちは，地下水がわきでている池で，かわきを潤すために，いつもいる高地から平地におりてくる。そのとき，水をくみにくる少女を，ヒヒたちがよく襲うので，男たちが武器を持って護衛についていくという。

このヒヒの形態は，他のヒヒ類とくらべて少しも差異はないが，知能は，他のヒヒ類よりもずっと高い。小さいうちにつかまったヒヒは，わけなく人間との生活に慣れてしまう。そのうえ，喜んで芸を覚えるし，主人には愛情をもち，ひどいしうちを受けても，それをがまんするまでになる。

雌はとてもおとなしく，雄よりもよく人間と心が通じ合うようになり，また雌のほうがずっと早く飼いならすことができる。



サバンナヒヒ。
雪をいただくキリマンジャロを背景に
ノンビリと見張りをするヒヒ。
いかにもアフリカ的な光景である。
PH. S. TREVOR–A. DENIS PROD.

サバンナヒヒの木登り姿。
岩石の多いところにすんでいるが
走るのも，木に登るのも得意で，すばやい。
PH. PLNIC–THOMPSON



7－2

ウーリークモザル。オマキザル科。
ブラジルの代表的なサルである。
尾は枝にしっかりと巻きつけることができ
5本めの手としての機能を果たしている。
手足を離したってだいじょうぶ。

PH. EPS

広鼻猿類　*Platyrhini*

広鼻猿類のサルは，真猿亜目の第２のグループで，中央・南アメリカの一部に生息している，きわめて変わった容貌をもつ生きものである。狭鼻猿類よりも無精で，メランコリックで，知能は低いがより人なつこく，作物に害を与えるようなことも少ない。だから，ふつうサルというと，大胆でふてぶてしく，ものをこわす悪い趣味がある動物というふうに思われているが，以上のようなこのサルの特徴をみると，これはサルの仲間として定義するほうが，かえって不自然に思えるほどだ。

広鼻猿類は，旧大陸のサル類よりも体格がひ弱く，四肢（しし）も細く，歯並びも違うのでそれと区別することができる。尾の先のほうには非常に強い筋肉があって，ときには５番めの手としての役目も果たす。何かに巻きつけると，尾はりっぱな把握器官に変わるのである。手の親指よりも，足の親指のほうが他の指とよく対向するようになっている。つめは扁平で，歯は32本あるいは36本からなり，上あご，下あごとも，両側にそれぞれ６本の臼歯（きゅうし）がある〔注１〕。旧大陸のサルがもっている頬袋（ほおぶくろ）と尻だこは，この広鼻猿類にはまったくない。

広鼻猿類のからだは，そんなに大きくはならない。毛の色には，かなりの変化があるが，アジア産やアフリカ産のある種類のサルほどに多彩ではない。メキシコ南部からアルゼンチンの北部にわたる地帯に分布している。もっぱら樹上生活をしているが，とりわけ湿地や沼沢地の原生林に集まっている。まったくやむをえないときのほかは，地上におりてこない。水が飲みたくなると，木の枝やツルを水面に浸し，それを強く絞って，そこから出る水を飲んで，かわきをいやすのである。〔注２〕

かれらは地面におりないで，何百キロもいくことができる。実際に樹林は，葉や花や芽や，昆虫（こんちゅう），イモ，鳥の卵，巣の中のひな，蜜といった，かれらが必要とするあらゆるものを供給してくれる。したがって，原住民の栽培した農作物を荒らすことは珍しい。そして，この種のサルのほとんどすべてが昼行性である。〔注３〕

その知的な能力は，明らかに狭鼻猿類のサルよりも劣っているが，性質は，穏やかでおおらかである。

捕獲された広鼻猿類のサルは，親しみやすい。けれども，年とともに意地が悪くなって，ときには危険になることもある。

母性愛は非常に強い。父ザルも母ザルも，注意深く子ザルの世話をし，子ザルをいつくしむのにはいつも感心する。

広鼻猿類は，キヌザル科とオマキザル科の２つの科に分けられる。

キヌザル科　*Callithricidae*

アルクトピテキ *Arctopitheci*，あるいはウイスティティ ouistiti〔注４〕とも名づけられているキヌザル類は，四肢（しし）のつめがかぎづめになっていることで，広鼻猿類の他のサルと区別できる。ただ，足の親指のつめだけは例外で，幅の広いかわらのような形をしている。

頭部にも特徴がある。ほとんど球形で，扁平の小さい顔面がついており，目は小さく，耳は大きくてふさ毛で飾られている。全体的にみてからだは弱々しく，四肢は短い。手の親指は他の指と対向してはいないが，足の親指は，他の４本の指と対向させることができる。毛におおわれた長い尾には，ものをつかむ力はまったくない。毛は絹のように柔らかく，歯の数は32本である。

もっぱら樹上生活をするこの仲間は，大部分，ブラジル，ギアナ，ペルーにすんでいる。

キヌザル類は大森林にすんでいるが，とくに森のなかの，わりあいに茂みの薄くなったところを好む。その行動は，まるでリスのようだ。かれらは決して垂直の姿勢はとらず，四肢で立っているか，尾をだらりと下げて，腹ばいに寝そべっているかである。

そしてリスのようにかぎづめで，木の枝にとりつく。決して，木から木へはとび移らず，すばやく木の幹を垂直によじ登る。かれらは，足のうら全体を地面につけて歩く。決して巣をつくらないことからみて，木の洞の中で夜を過ごすものと思われる。つかまると，寝場所に決めてやった箱の中で，喜んで寝る。また昼の間，そこにひっこんでいることもある。

かれらは忘れっぽく，ちょっと前に興味をもったことでも，すぐに忘れてしまう。こういった気まぐれな性質は，また，はっきりとした理由もなしに，喜んだかと思うとすぐに悲しそうにする，かれらの態度にも表われている。かれらは，自分の境遇を喜んでいるように見えるときには，快く人の愛撫を受け入れるのだが，急に飼い主をひっかいたり，かみついたりもする。

飼育されているキヌザルはなんでも食べる。果実，穀物，花，それに昆虫やミールワーム〔注５〕も加えてやるとよい。



アカティティ。オマキザル科。
南アメリカはベネズエラやアマゾン川上流域の
熱帯雨林にすむ小型のサルで
焦げ茶色の毛と，長い尾が特徴である。
PH. EPS VAN NOSTRANDT



一般に，雌は１回に１子だけしか出産しないが，２，３頭の子を生むこともある。このような場合には，母ザルは１頭を自分の背中につかまらせ，もう１頭を胸にぶら下がらせる。そして２頭の子どもがそれぞれ乳を飲めるように，位置を変えてやるのである。

キヌザル科には，２つの属がある。それはタマリン属 *Saguinus* とキヌザル(マーモセット）属 *Callithrix* である〔注６〕。タマリン属には24種がふくまれ，そのなかには，次に述べるゴールデンライオンタマリンもはいっている。一方，キヌザル属には９種がある。われわれは２種のキヌザル，つまりコモンマーモセットとピグミーマーモセットに注目しよう。

ゴールデンライオンタマリン
Saguinus rosalia

タマリン属に属するアメリカ産のサル。全長65～75センチで，そのうち40センチは尾である。毛は赤みがかった黄色で，金色の光沢がある。アマゾン川上流域の森林のなかで，果実や昆虫（こんちゅう）を食べて生活している。

動物商たちは，ゴールデンライオンタマリンを，俗に《シシザル》と呼んでいる。というのは，このグループのサルのなかでもっとも大きいからである。顔は明るいかっ色で，そのやや大きな目の周囲には，濃いかっ色の

クチヒゲタマリン。キヌザル科。
新大陸にすむ小さなサルで
白い毛にかこまれたかわいい口のなかには
旧大陸のサルと同じ数の32本の歯がある。

PH. EPS



毛がはえており，ほおと額の毛は，細くて短く，黄かっ色である。頭頂部をおおっている毛は，長く頭の両側にたれ下がり，濃いクリ色のたてがみとなって終わっている。

健康で，日本やヨーロッパまで連れてこられるだけの抵抗力があり，しかも，いちばん美しく，いちばんかわいらしいサルだ。かれらは他のキヌザル類よりも，飼育下の生活によく耐える。このサルの値段は高いので，これを買った人たちは，きっとゆき届いた世話をしようという気持になるに違いない。

このサルは，寒さには強いが，暑すぎる気候や，また，あまりに急激な温度の変化は苦手である。故郷の森のなかにいるときは，決して日光に身をさらさず，日中のいちばん暑いときには，注意して草や木の特別深くおい茂っている場所に身をひそめて，外には出てこない。反対に，比較的温度の低い夜気にはかなり抵抗力がある。このサルが長い時間日なたにいたので，日射病にかかって死んだ例が，ヨーロッパの記録にある。

コモンマーモセット

Callithrix jacchus

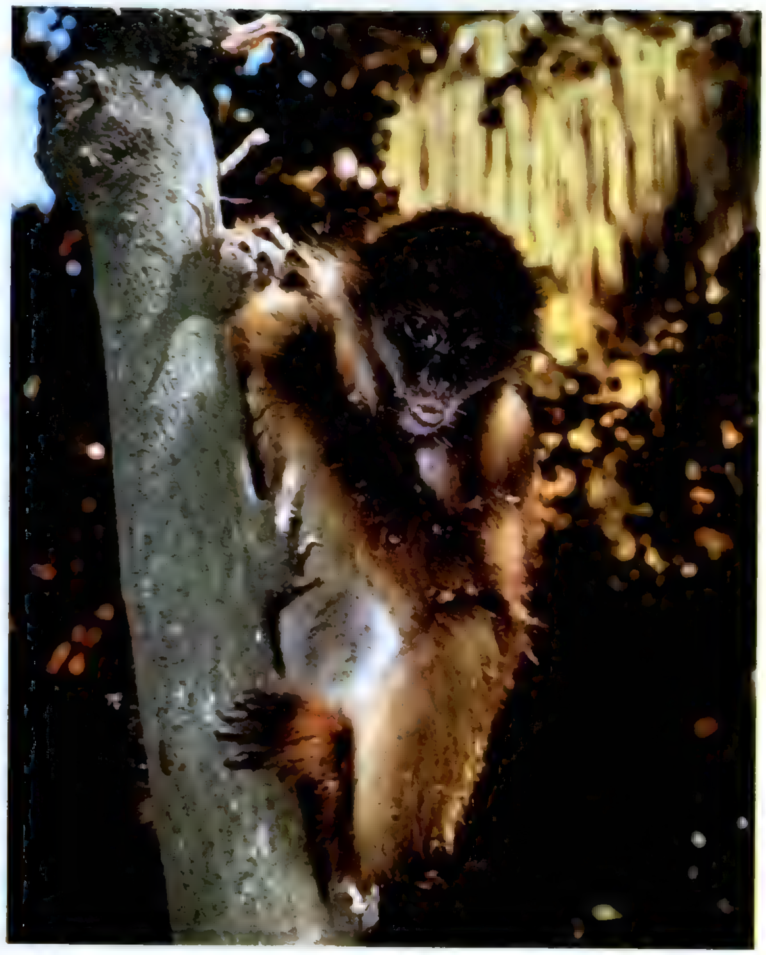
中央・南アメリカ産で，キヌザル科の一種。頭胴長22～27センチで，30～35センチにも及ぶ尾をもっている。毛の色は，黄錆色が基調になっている。アマゾン地方―アマゾン川上流域―の森林にすみ，やはり昆虫（こんちゅう）やくだものを食べている。

コモンマーモセットは，キヌザル科と総称されるこの大きな科のなかでも，いちばんよく知られている代表的な種である。よく均整のとれたからだは，長く柔らかい毛でおおわれているが，その毛は，根もとでは黒っぽく，中ほどでは黄緑色に変わり，次いで完全な黒に転じ，先のほうで白っぽくなって終わっている。先に述べた黄錆色は，背の上部をいろどっている。下のほうでは黒と白の，波をうったような横じまが交互にあらわれる。尾は根もとが黒っぽくて，20くらいの白っぽい輪がついているが，先のほうは白い。

濃いかっ色をした頭には，同じかっ色をした三角形の模様が1つ浮きでている。白く輝くふさ毛が，珍しい耳飾りとなっている。黄土色をした顔には，白っぽい毛がまばらにある。

コモンマーモセット。
小柄なこのサルは
アマゾン川流域に群れをなしてすむ。
ペットとして，なじみの深いサルである。
PH. VISAGE-JACANA







青色の地域はキヌザルの分布域で
中央アメリカの一部と
南アメリカの半分にわたる。
なかでも，ブラジル，ギアナ，ペルーには
もっとも多くの種類がすんでいる。

キヌザル類は気が短くておこりっぽく，おこると独特な一連のかん高い声をだす。ところが，短気な性質の反面，ひどくおく病でもある。たった1匹のスズメバチにもびっくりするくらいなのだ。

おとなになってから捕えたものは，人になれるのに長い時間がかかる。しかし，ひとたび人間とのまじわりがうまれると，サルはすすんで人になつくようになる。同じ家にすんでいる他の動物，とくにネコとは仲良くなり，いっしょに遊んだり，眠ったりすることさえある。

世界でいちばん小さいサルの1つは，キヌザル属のピグミーマーモセット *Callithrix pygmaea* である。アマゾン川上流の森林のなかにすんでいる。からだと頭の長さは同じくらいで，頭胴長は12，13センチ，尾は20センチである。体重は70グラム以上にはならない。

ピグミーマーモセットは，きわめて敏しょうで活動的である。しじゅう頭を動かしながら，せっかちな動作で木々の間を移動する。そのうえかれらは，木の枝の上をあとずさりして歩くという奇妙な習性をもっている。食べるものは，コモンマーモセットと同じように，果実と昆虫である。

ピグミーマーモセット。
世界でいちばん小さいサルである。
つり上がった目の，仮面のように無表情な顔で
トカゲを食べている。(左上)

オマキザル科　*Cebidae*

オマキザル科という，この範囲の広い科は，広鼻猿類のサルのなかでも，もっとも重要なものとみなすことができる。そして，このオマキザル科をもって，真猿亜目の巻頭に掲げた分類表も完結するのである。この科には，次のような特徴をもつ，中央・南アメリカ産のすべてのサルがはいる。

- 36本の歯がある。あごの片側についていえば，上あごから下あごへと次のように配置されている。門歯2／2，犬歯1／1，小臼歯（きゅうし）3／3，大臼歯3／3。
- 手の親指は退化しているものが多く，種によっては消失している。足の親指はどの種についてみても，他の4本の指に対向させることができる。
- つめは扁平である。ゲルディモンキーだけはかぎづめをもっている。
- 尾は，どの種についてみてもよく発達しており，なかにはウーリーモンキーのように，把握性をもつものがある。
- 1産1子である。

オマキザル類は，典型的な森林生活，樹上

チュウヘイクモザル。オマキザル科。
メキシコからパナマにかけての地域にすむ。
毛並みはあらく，黒と茶かっ色
それに黄かっ色がまじった色をしている。
飼育下では，おとなしく従順である。(右上)

生活をするサルで，ヨザルをのぞいては昼行性である。主食は，植物性のものだが，多くの種は雑食性である。中央アメリカおよび南アメリカの熱帯林にすんでいる。

多くの種をふくんでいるオマキザル科のうち，ゲルディモンキー，フンボルトウーリーモンキー，クロクモザル，ノドジロオマキザル，リスザル，アカホエザル，シロアタマサキ，ハゲウワカリ，エリマキティティおよびヨザルについてみていくことにしよう。

ゲルディモンキー

Callimico goeldii

この珍しい中央・南アメリカ産のサルは，キヌザル科の特性とオマキザル科の特徴とをかねそなえている。すなわち，キヌザル科のサルのようなかぎづめと，オマキザル科のサルのような36本の歯をもっているのである。このサルはアマゾン川上流の森林にすみ，果実や木の葉，小動物（鳥のひな，昆虫など）を食べて生活している。

ゲルディモンキーは以上のように，新大陸でもっとも風変わりなサルである。このゲルディモンキーが発見され，記述されたのは，ようやく20世紀のはじめになってからのことである。キヌザルにきわめて近く，頭胴長は約20センチ，体毛は深いかっ色で，首の部分と背中，そしてその長い尾のもとの部分に，クリ色をしたはん紋がある。このサルのことは，今でもほとんど知られていない。きわめてすばやくて，生けどりにするのはむずかしい。

フンボルトウーリーモンキー

Lagothrix lagotricha

中央・南アメリカ産のサルで，頭胴長70センチに加えて，同じくらいの長さの尾をもっている。この尾は，ものをつかむことができ，先端の内側には毛がない。からだの毛は黒っぽくて，頭は五分刈りにしたように見える。

ラゴトリック属，つまりウーリーモンキー類は，たいへんに柔和な目をしているが，その目はかれらの性質をよく表わしている。からだはずんぐりとして重量感があり，頭は大きくて丸い。耳は，内側も外側も毛でおおわれていて，まるでそぎ落としたような格好である。四肢（しし）はたくましく，同じくらいの長さで，それぞれ５本の指がある。つめはこころもち内くぼみになっている。ただし，手の親指のつめは例外で，平たい。体色は全



ゲルディモンキー。
ちょっとカールした毛と，長い尾が
このかわいい動物の特徴である。
たいへん珍しいサルで，はじめて，生きてヨーロッパにお目見えしたのは1915年であった。

PH. EPS A. MARGIOCCO PALNIC-DE WYS



体的に暗い色だが、胸は柔らかい羊毛のような毛でおおわれ、ヨウモウザルともいわれる。

この動物は、ベネズエラおよびコロンビアの大西洋岸地方に生息している。慎重ではあるが、決してのろまでも無器用でもないその行動から、冷静で考え深い性質を見てとることができる。かれはまた、老練な木登りの名手で、ふつう，これならばだいじょうぶだという，次につかまる場所が見つからないうちは，決して今つかんでいる枝から手を離さない。把握性のある尾は，こうした運動を助ける。しかしときには，大胆な跳躍もするし，驚くべき速さで走ったりもする。

どんな体位で木からぶら下がっていようとも，このサルたちは平気である。しかし，このサルのもっとも優美な姿勢は，尾で枝にぶら下がって，手や足で何かをもてあそんでいるときである。

このサルも，他のオマキザル類のサルと同じように，すみっこにちぢこまって眠る。しかし，ときには尾をらせん形に巻いて，柔らかいクッションのような形にし，その上に頭をのせ，折り曲げた腕に顔を隠して横になって寝ることもある。飼いならすのは比較的やさしい。

アマゾン川上流地方や，オリノコ川流域の森林に，ウーリーモンキーのいくつかの種が広くすんでいる。

クロクモザル　*Ateles paniscus*

中央・南アメリカ産の優美なサルで，その長い四肢（しし）からクモザルと呼ばれている。頭胴長は55センチで，これに，完全に把握性をもった80センチの尾が加わる。アマゾン川上流地方の森林にすみ，木のいちばん高いところにとまっているのをよく見かける。果実や木の葉，そして木の上の巣を襲って小鳥などを捕え，常食としている。

このサルを《クモザル》と名づけた以上に，ぴったりとしたうまい名まえは考えつくまい。ひょろ長い四肢をそなえた，きゃしゃなからだつきは，どんな観察者にも——たとえそれが専門家でなくとも——クモを連想させる。このサルの頭は非常に小さく，顔にはひげがなく，手の親指はまったく未発達である，ということをつけ加えておこう。〔注7〕

もっともふつうに見られるクモザルは，コアタ Coata，すなわちクロクモザルであって，この仲間のなかでは最大のものの1つである。全長は1.35メートルに達するものもあり，そのうち尾は80センチである。

どちらかといえば，手ざわりの悪いこのサルの体毛は，肩のあたりで長く，背中ではいっそう密生し，下半身では明るい色になる。額には一種の冠毛がはえている。焦げ茶色の顔をのぞけば，からだ全体の色は黒であり，手のひらも暗色である。かっ色で生き生きとした目は，好感のもてる，善良でいていたずらっぽいその相貌をつくりあげている。

クモザルの動作はすばやい。四肢が長いために，やすやすと木によじ登ることができるし，枝から枝へと苦もなく移動する。身軽で敏しょうなこのサルたちは，木のなかでもいちばん高い枝まで登っていく。そのとき，長い四肢を奇妙な格好で前後に突きだし，ちょっととぶこともある。しかしふつうは，尾の助けをかりて，しっかりした次のよりどころを求めてからでなければ，決して枝を離れることはない。またかれらが，尾で枝からさかさまにぶら下がり，一団となって，まるでふさのようにもつれあうさまは，実に奇妙な光

クロクモザル。
長い手足が５本もある奇形のサルが発見された？
おちついて見てみよう。
丸太にからみついている１本は，実は尾なのだ。
PH. ATLAS-SHULTZ

コモンマーモセット。
バレリーナの髪飾りのような白い毛と
黒目がちの大きなひとみ。
このサルは，愛玩用として
ヨーロッパでは広く飼われている。（右）
PH. VISAGE-JACANA





フンボルトウーリーモンキー。ヨウモウザルとも呼ばれる。ちょっと近づきがたい感じだが，いざ飼ってみると，おとなしくてきれい好きで，愛情深く，人間のよき友だちになる。
PH. ATLAS・SCHULTZ





景である。かれらは木の葉や果実を食べて満足している。

ノドジロオマキザル

Cebus capucinus

中央・南アメリカ産で、頭胴長45センチに加えて、35センチの尾をもっている。この尾は、全体が毛でおおわれていて、把握性はない。しかし、樹木に巻きつけることくらいはできる。このかっ色のからだをした小動物は、コスタリカからブラジルにかけての森林中にすんでいる。同類の大部分のものと同じように、果実や木の葉、小動物を食べる。そしてその行動は活発そのものである。

多くの動物園にいるノドジロオマキザルは、サジューとも呼ばれ、オマキザル類のなかではもっとも典型的な体形をしている〔注8〕。頭蓋（ずがい）は丸く、腕は中くらいの長さで、手には5本の指がある。やや密生したひげが顔を飾り、胴体は濃密で短い毛でおおわれている。

ノドジロオマキザルによって、中央・南アメリカ大陸にもオナガザル類のサルがいるのだと、まちがわれがちである。それほどかれらの行動は、活発さと敏しょうさを特徴とする、アフリカ産のオナガザルに似ているのである。

ノドジロオマキザルは、サルというごく一般的なことばがそっくり当てはまるような動物である。すなわち、活発で、利口で、勇敢で、好奇心に富む一方、気まぐれである。かれらは飼いやすいので、たくさんヨーロッパに輸入されている。ドイツ人はかれらを《ナキザル》と名づけた。それは、きげんのよいときの声が、穏やかな、また、なくような調子をおびているからである。だが、非常におこったときには、臆面もなくおおいにほえたて、鋭い叫びをあげて、途方もない大騒ぎをする。

ノドジロオマキザルは非常に広く分布している。晩年のリンネ〔注9〕は、このサルと顔をあわせたに違いないが、次のように書いている。

「このサルはかかとで歩く。跳躍をせず、つねに鳥のようにチョンチョンとはね回っている。時と場合によっては、非常に鋭く恐ろしい声で鳴き叫び、敵を恐れさせる。ふつうは、まるでセミのような声をだして鳴き、おこるとイヌのようにほえる。尾をらせん形にして、首のまわりに巻きつける。このサルの放つにおいは、いくぶんじゃこうのにおいに似ている」

ノドジロオマキザルは、コスタリカからアマゾン川上流域北部をへて、ブラジルにまたがる森林中にすんでいると述べたが、土の表面が、茂みですっかりおおわれていないような場所を好む。一生をほとんど木の上で過ごし、必要な場合、たとえばかわきをいやしにいくときとか、トウモロコシ畑を荒らしにいくとき以外は、木から離れることはない。

同じ場所に長い間いることはごく珍しい。昼間は木から木へと渡り歩いたり、えさをあさったりして過ごし、夜間は葉のよく茂った枝で眠る。一般に5～8頭ないしは10頭で家族的なまとまりをつくって生活している。そこでは、明らかに雄が支配権をもっている。しかし一方、年老いた雄が1頭で暮らしているのに出会うこともある。

リスザル *Saimiri sciurea*

広鼻猿類オマキザル科のサルで、全長約80センチ、そのうち50センチは尾である。ビロードのような毛におおわれ、色は背部が赤かっ色、四肢はオレンジ色で、腹は白い。敏しょうに木登りをするこのサルは、昼行性で、ベネズエラ、コロンビア、ギアナ、アマゾン流域の森林中の樹上に生息する。果実、種子、昆虫（こんちゅう）を主食とする。非常に小心だが、飼いならすのは簡単である。〔注10〕

整った顔つき、変化に富む毛色、動作の活発さと優美さ、これらのものが、サイミリ、すなわちリスザルを、新大陸産のサルのなかで、もっとも魅力的なものにしている。

リスザルは、把握性のある尾をもつサルと、把握性のない尾をもつサルとのあいだの、中間の種の代表的なものとみなすことができる。事実、どっしりとして長い尾は、把握性はないが、木の枝のまわりに半ば巻きつくことができ、好きな木登りのときには、ある程度、からだをささえることもできるのである。しかし、把握性をもっているとはいえない。

リスザルは、長い四肢と大きな頭部をもつ、ほっそりとした動物である。額は高く、顔は小さく、大きな2つの目はたがいに接近している。毛並みはかなりまばらで、非常に特殊なはえ方をしている。腹部は黄色っぽく、鈍い黒色のつやがあり、頭部は石炭色。四肢は美しいこがね色である。

リスザルは、植物が豊かに茂っている川の岸に好んで出没し、すみつく。100頭からの群れをなして、枝の上に集まっている〔注11〕。この集団には、しばしばノドジロオマキザルの集団が加わって混群をつくり、より大きなものとなる。

日中はいつも活動しているが、夜は茂みのなかに隠れて、朝まで身動きもしないでいるという、天性の慎重居士であり、昼でもちょっと驚かしただけで逃げだしてしまう。そんなときは、集団全体はリーダーのまわりに集まり、すばやくもっと上のほうの枝へ難を避ける。休むときには、イヌのような姿勢ですわる。眠っている間は、またの間に頭部をはさみこみ、頭が地面に触れるくらいまで前かがみになる。

リスザルはその愛すべき性質のために、楽しみの多いペットとなる。そのせいか、現地人の家へいくと、よくリスザルに会うことがある。しかし、成獣になってから捕えられた場合には、自由な生活を失ってしまったことにとてもがまんできず、まだ幼いうちに森で捕えられた赤ん坊と同じように、すぐに死んでしまう。

アカホエザル *Alouatta seniculus*

広鼻猿類オマキザル科のサル。全長1.40メートル。そのうちの70センチは、把握性と鋭敏な感覚をもった尾である。この種も、すべてのホエザル類と同様に、大きな喉頭嚢（こうとうのう）をもっている〔注12〕。その濃い毛並みは赤かっ色で、背は金色の光沢をもっている。

アクロバットのように木をよじ登るアカホエザルは、南アメリカの北部森林に群れをな



緑色の地域は、オマキザル科の分布域。
南は、ラプラタ川流域までひろがっているが
チリ側にはいない。

サバンナヒヒ。
このように集団をなして生活しており
年をとり、知と力をあわせもった雄が
リーダーとなって群れを統率している。（左）

PH. FREDERIC-JACANA



7－14

ノドジロオマキザル。
顔のまわりと胸もとの白い毛が
修道士の僧衣を思わせる。
そういえば，表情も敬けんで
いささか哲学的でさえあるようだ。

PH. HLADICK-JACANA

して生活し、果実や小動物を食べている。からだつきはどっしりとしていて、頭はピラミッドのようにとがり，口先を突きだしていて，手の親指は細い。毛は下あごの部分でひげのようにのびている。

重要な特色は，その舌骨にある。この舌骨はくまでのような形をしたいびつな骨で，舌の基部と，ちょうど膀胱（ぼうこう）のように丸くふくらむ咽頭（いんとう）との間に位置している。フンボルトは，この非常に特殊な骨を詳しく研究した最初のナチュラリストであった。かれは次のように記している。

「中央・南アメリカ産のサルのなかで，あまりからだの大きくないものはふつうの細い舌骨をもっているが，大型のサルは舌骨が非常に大きくなっていて，1個の巨大な骨の閻室を形成しており，その上に舌がのっている。喉頭の上部には6個の嚢があり，そこに声帯がある。そのうちの2つは，ハトの巣のような形で，鳥類の喉頭の下部によく似ている。この骨の閻室の中を空気が強く通るときは，ホエザル特有のあの嘆くような声となるのである。

喉頭に包み込まれている骨室の寸法から考えてみると，いみじくも《ホエザル》と名づけられているこのサルの，声の強さも声量も，驚くほどのことはない──事実それは，ライオンのほえ声や，シカの鳴き声とはくらべものにはならない──。しかしまた，この動物の，キツネよりも小さい体長を考えてみれば，それは大きな特徴であるといえる。何人ものナチュラリストが，このサルの声を文字に書き表わそうとしたが，うまくいかなかった。その声をはっきり知ろうと思うならば，実際にそれを聞いてみるよりほかかない」

ホエザルが発する声音は，きわめて多様である。それは獲物にとびかかろうとしているジャガーのほえ声，ヘッカリーの鳴き声，ぬきさしならぬ危機にさらされているヤマネコ類の叫び，そういったものを思い起こさせる。長いひげをはやしたこの奇妙な合唱隊員たちが，たがいに見つめ合いながら，このうえもなくまじめなようすで，おごそかに歌っている光景ほどこっけいなものはない。

ホエザルの長い尾の先端には，毛がはえていない。その裏面には非常に強力な筋肉が走っており，そのために尾を把握器官として使うことができるのである。

ホエザルは木登りができる。しかし，他のサルが得意としているような大胆な跳躍は決してしない。なるほど木によじ登りはするが，どんなときにも別の枝を見定めておいて，枝に尾でつり下がったまま，2度，3度と確かめてからでなければ，とび移らないのである。



リスサル。
ぬいぐるみ人形のようなきれいなサルである。
夜，気温が下がるとヤシの葉むらに集まって
たがいにからだを暖め合い
朝がくるまでそうしている。
PH. JACQUES CIX-JACANA



このサルは，ベネズエラ，コロンビア，ギアナ，そしてとくにブラジル北部の湿地帯をおおう密林に，広く分布している。

アカホエザルとはきわめて近縁で，同様によく知られているものとして，パラグアイおよびその近隣地帯にすむクロホエザル*Alouat tacaraya*をあげることができる。これは長くて黒い毛並みのサルである。

シロアタマサキ *Pithecia pithecia*

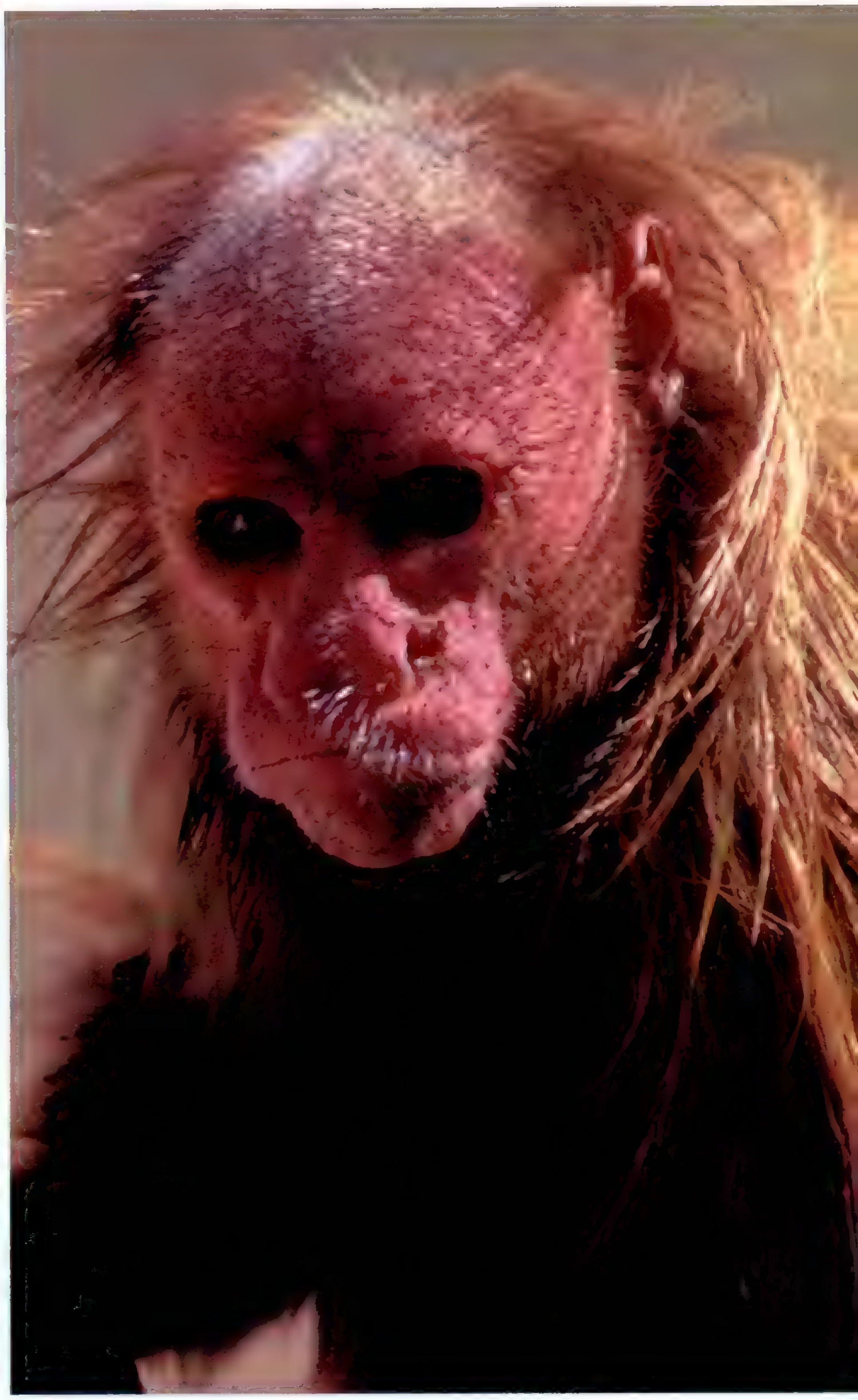
広鼻猿類オマキザル科のサル。全長約80センチで，その半分は把握性をもたない尾である。その毛並みは長く濃く，胴体の部分は黒い。年老いた雄の頭部の毛並みは灰色がかっている。雌の毛並みは，背中が灰色，腹部は焦げ茶色である。

サキは，ブラジルおよびギアナの森林中に群れをなしてすみ，果実，種子，昆虫（こんちゅう）を主食にしている。このサルはあまり大胆でなく，飼いならすのは容易であるが，たえずびくびくして悲しげなふん囲気をただよわせている。

長くちぢれた毛のために，他のサルよりもいっそうずんぐりしてみえる，重量感のある

クロホエザル。
アマゾン川下流域の大森林にすむ。
喉頭嚢をふくらませて
独特の鳴き声をひびかせているところである。
PH. HLADIK-JACANA





からだつきをしたシロアタマサキは，比較的がんじょうな四肢をもっている。尾はかなり大きいが，ものにひっかけたり，つかんだりすることはできない。

頭のまん中で奇妙に分けられている毛は，かつらのように見えるが，ほおと下あごの毛は，まばらなひげになっている。かれらの黒っぽい顔面は，白あるいは赤茶色の密生した毛でおおわれている。

このサルは，大木のおい茂る森林をきらい，植物のあまり密生していない地域を好んで，6頭，8頭，ときには10頭もの群れをなして生活している。

サキは，他のサルといっしょになることをきらう。サキをつかまえるのはなみたいていなことではない。というのは，かれらは人に見つかると，目をみはるようなすばやさで逃げだすからである。

かれらはしばしば，声をかぎりに叫んで，猟師を驚かせるということがある。いったん飼いならされると，かなりよく飼育下の生活に耐える。しかし，終始悲しいものうげな態度を示し，見る人に疲れ果てたような印象を与える。

左はアカウワカリ，右はハゲウワカリ。
アマゾン川上流域にすむ。
亡者のような顔のこのサルには
森のなかでは出会いたくないものである。
PH. RUSS KINNE-J. SIMON

ハゲウワカリ *Cacajao calvus*

広鼻猿類オマキザル科のサル。全長40センチで，退化した尾は，そのうちの9センチしかない。毛並みは絹のようで，長い。頭部ははげており，背部では毛がまばらで淡黄かっ色を帯び，腹部ではこがね色になる。

顔の深紅色が特徴で，その上には黄色く密生したまゆ毛があり，目には赤みがかった黄色の影がさしている。短い毛しかない，ほとんどはげた頭は，背中の長い毛と対照的で，この動物の風貌をいっそう奇妙にしている。

エリマキティティ *Callicebus torquatus*

広鼻猿類オマキザル科のサルで，エリマキティティはティティのなかでも代表的な種である。全長90センチで，そのうち50センチが把握力のない尾である。おびえやすいこのサルは，ブラジル，ベネズエラの原生林中で，植物，昆虫（こんちゅう），鳥の巣からとってきた卵を食物とし，小さい集団をつくって生活している。

ティティの四肢は長くきゃしゃで，丸くてひげのない頭部と，細い胴体をもっている。大きな目とあごとは，同じような明るい色をしている。かれらは，きわめて活発な中央・南アメリカ産のサルの一群に属している。かなり大きな喉頭（こうとう）部は非常に特徴的で，相当に大きな声を出す。

このティティは，柔らかで黒い，絹のような毛の優美なサルである。光沢のある白い顔には，目，鼻，口がくっきりと描きだされている。耳はいい形で，実用性を重んじてか，毛がはえていない。首の前のほうには，指1本くらいの幅の白いしまを，まるで首飾りのようにめぐらしている。胴も足も手も同じように黒い。しかし手は，先端の表面では白っぽくなる。

宣教師たちは，これらのはっきりとしたはん紋を，未亡人のベールやハンカチーフ，あるいは手袋にみたてるならわしであった。こういったことから，この小動物が発見されたときに《小さな後家さん》というあだ名が与えられたのである。

この《小さな後家さん》の性格は，おく病でおとなしい。腹の減っているときでさえも，差しだされたえさはほとんど受けつけない。かれらは，他のサルといっしょにいるのをことさらに避けようとし，ほんの小さなリスザルの前からも逃げだそうとする。周囲で起こることに鋭い視線を投じながら，何時間ものあいだおとなしくすわっている。



アカウワカリ。
流行の能面式化粧とまちがえそうな顔である。
額の前のほうが全体にはげていて
なまじっか人間に似ているだけに
いっそう気味が悪い。

PH. G. M. HLADIK



ヨザル　*Aotes trivirgatus*

広鼻猿類オマキザル科のサル。頭胴長は35センチで，把握性のない尾の先端は黒く，40センチに達する。これはまったくの夜行性である〔注13〕。果実を主食とするが，また小型のトカゲや鳥やその卵なども食べる。

アザラ **Don F. d' Azara** は，この世にも奇妙なサルを世界に知らせた最初のナチュラリストであった。

このサルは，ジャコウネコの目を思わせるような大きな２つの目と，目のそばのきわめて小さな耳とによって，その前に出てきたオマキザル類とは，はっきりと区別することができる。

フクロウザルとも呼ばれるこのヨザルの優美なからだは，細くちぢれた毛でおおわれているが，この毛並みは上体部では灰かっ色である。ややきわだった赤銅色の光沢が，あたかも戯れあうようにまじっている。

パナマから南アメリカの中央部にわたる，太平洋岸や大西洋岸の地帯に分布し，木の洞やほら穴の中で暮らしている。夜間に食物を求め，日の出とともに自分で選んだ洞の中に引きこもり，日中はずっとその中にうずくまっている。

夜みると，その顔つきがフクロウの頭のようにみえるこの動物は，幼いうちに捕えて，じょうずに扱うと，かなりよく飼いならすことができる。

いくつかの動物園でこのサルを見ることはできるが，しかし，ヨザルは比較的珍しい動物といえよう。

この小さなサルは，真猿類のなかでただ１つの夜行性であり，光に耐えることができない。光からはがんこに身を隠して人の目をのがれているので，このサルに出会うためには，特別に恵まれた条件がそろっていなければならない。

ヨザル。
名のとおり夜行性で
パナマ運河からブラジルにいたる地域にすむ。
真猿類のなかでただ１つの，夜行性のサルである。
PH. ALDO MARGIOCCO



7—20

リスサルの集団。
頭が丸く，かわいい顔つきのこのサルは
芝居で，子役が演ずるサルを思わせる。
動作はすばやく，利口である。

PH. EPS

カラーページ解説

バロコロラド島のホエザル観察

伊谷純一郎

パナマ運河ができたとき，南北両大陸をつなぐ地峡に，１つの湖が出現した。１本の川をせきとめたためにできたダム湖で，その名をガツン湖という。その結果，それまでは丘陵の頂であったところが島になった。バロコロラド島は，こうして1914年にできあがった。南北５キロ，東西６キロの島で，うっそうたる熱帯樹林におおわれている。かつて付近の山野にすみついていた動物たちは，水からのがれて丘の高みに集まり，結局，島に閉じ込められることになった。

多くの研究成果を生みだした島

この無人の島は，最初は付近の原住民の猟場になっていたが，1923年に熱帯アメリカ研究所の手で自然保護区に指定され，野外研究施設と研究者のための宿泊施設が建てられ，研究室には文献が整えられた。島の尾根に沿って，幾本もの道がつけられ，それには番号が付された。そういった５本の道の終点に当たる湖のほとりには，自然観察のために寝泊まりできる小屋が建てられた。1946年になって，この島の管理はスミソニアン研究所に移され，地峡生物保護区の一部に繰り入れられた。

今日までに，多くの生物学者がこの島を訪れ，植物や熱帯降雨林，昆虫（こんちゅう），鳥類，哺乳（ほにゅう）動物についての調査を行なった。そして，この島とこの島につくられた小さな研究施設は，非常に多くの研究成果を生むことになった。シュネイラの，熱帯性のアリについてのすぐれた研究や，カーペンターのホエザルの研究などが，その代表的なものである。

カーペンターは，1931年から1932年にかけて，さらに1932年から1933年にかけての２回の調査を皮切りに，1935年には第３回の調査を行ない，1951年には，かれの弟子のコリアスとサウスウィックが，また1955年にはアルトマンが，ホエザルの野外観察を継承した。この30年にわたった，ホエザルの個体群の追跡，研究によって，その生態や行動の分析が深められてきた。

第１回の調査では，この島のホエザルの全頭数は，23群398頭と推定され，第２回には，28群489頭という数値が出されている。それが，1951年の第４回の調査では，30群239頭と激減した。この原因はおそらく黄熱病のためであろうと，サウスウィックは述べている。しかし，1959年にはポピュレーション（個体数）は回復し，44群814頭となっている。

野外観察施設の意義

ホエザルの群れは，それぞれなじみのある土地と結びついて生活しており，そこに接近してきた他の群れに対しては，大声をあげて，たがいに牽制しあう。研究者たちは，まず，１つ１つの群れの所在を確かめ，ホエザルが列をなして，高い木の枝から枝に渡っていくのをしんぼう強く数えあげて，上記の個体数をはじきだしたのである。わたしたちには，それがいかに困難な調査であったかということが手にとるようにわかる。しかし，熱帯降雨林のなかでのこのような継続的な調査は，ここが島という閉鎖的な条件であったからこそ，可能であった。



このパナマ地峡からアマゾン流域にひろがる熱帯降雨林のなかに，すっぽりと包み込まれたように分布している広鼻猿類の研究は，その環境ゆえに非常に立ちおくれているといわなければならない。日本からは，1960年代のはじめに徳田喜三郎博士がアマゾン川上流域の調査を行なった。1971年の夏には，日本モンキーセンターが同じ地域に調査隊を送る。

バロコロラド島の野外研究施設については，その概略を述べてきたが，最後にこのような施設の重要性を，再度強調しておきたい。ある意味では，バロコロラド島の例は，ダム湖建設という自然破壊を，人間がりっぱに償った例であるといえるかもしれない。今日，人間と自然との均衡を観測する測候所のようなものが，もっともっとあってよいとわたしは思う。それは，かつてのような自然への侵略のとりでではなく，逆に，ものいわぬ自然の代弁者としての役目を果たすものでなければならないであろう。

日本には，餌づけされたニホンザルと観光とが結びついた公園がたくさんできあがったが，そのあり方は，いま，１つの反省期にさしかかっているといってよい。バロコロラド島に似た形態としては，京都大学霊長類研究所の野外観察施設となった宮崎県の幸島をあげることができるが，これも，まだまだ理想的なものということはできない。

わたしたちは今，アフリカの奥地に，野生のチンパンジーのための国際的な野外観察施設の建設を計画している。これは野外調査以上に困難な仕事である。■

カラーページ注

〔注１〕 **広鼻猿類の臼歯** 上下あごとも，両側にそれぞれ６本の臼歯をもつのは，広鼻猿類のなかのオマキザル科のサルたちであって，2／2，1／1，3／3，3／3の歯式をもつ。これに対して同じ広鼻猿類のキヌザル科は，2／2，1／1，3／3，2／2の歯式をもつから，臼歯は５対ということになる。

〔注２〕 **木にしみこませた水を飲む** ここに述べられているような一種の道具使用ともいうべき行動が，広鼻猿類で起こりうるか否かということは問題である。これに類似した現象は，チンパンジーについて，手でもんでスポンジ状にした木の葉を，木の洞につっこみ，そこにたまった水を吸うという例が，グドー女史によって観察されている。

〔注３〕 **昼行性** これは昼間に活動し，夜間は通常休眠しているような性質をもった種をさしていう言葉である。この逆は夜行性。広鼻猿類には，ただ１種だけ夜行性の種，ヨザルがあり，他はすべて昼行性である。

〔注４〕 **アルクトピテキ** *Arctopitheci* この名は，1812年にE．ジョフロアがつけたもので，キヌザル類をさす。ウイスティティ（ouistiti）は，キヌザル類のフランス名である

〔注５〕 **ミールワーム** テネブリオ属（ゴミムシダマシ科）の一種の幼虫で，穀類やパンくずで容易に繁殖させることができ，広鼻猿類，原猿類，そして食虫類の動物などのえさとして用いる。とくにキヌザル類の飼育には欠かすことのできないものである。

〔注６〕 **キヌザル科** 古くは５属に分けられていたが，現在では２つの属にまとめられている。１つは，ふつうタマリンと呼ばれているサグイヌス属（古くは，レオントケブス，サグイヌス，タマリヌスの３属）。もう一方は，ふつうマーモセットと呼ばれているカリトリックス属（古くはカリトリックス属とケビュエラ属の２属），すなわちキヌザル属である。後者は，下あごの犬歯が門歯状を呈しており，前者は，それが犬歯状であることから区別されている。

〔注７〕 **クモザルの手** 樹上性のサルの多くのものに，手の特殊化が見られる。クモザルはそのなかでも極端な例であって，少なくとも外観的には，手の親指を完全に欠いている。かれらは，手をかぎ状にして枝にひっかけたり，またはぶら下がったりというふうに用いる。

〔注８〕 **オマキザルの体形** オマキザル科には，とくに樹上生活への適応に基づく特殊化ということもあって，たとえば，クモザルやホエザルのとくに発達した尾とか，クモザルの親指を欠いた手とか，ホエザルの舌骨の変形などが見られるが，オマキザルは，そのなかでもあまり形態的に特殊化しなかったグループとして知られている。

〔注９〕 **リンネ** Carl von Linneaus（1707—78） スウェーデンの博物学者。生物分類法の基礎を確立した。属名と種名の連記によって表わす二名法を確立したのもリンネである。（第２号・注１を参照）

〔注10〕 **リスザル** 飼育が容易であり，またおりの中でもよく繁殖するので，実験動物として数多く用いられている。1958年，アメリカ合衆国の人工衛星に最初に乗った動物がこのサルである。

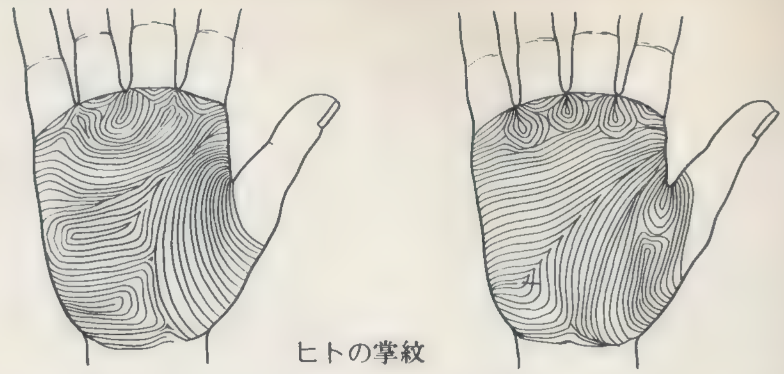
〔注11〕 **リスザルの群れ** まだよくわかっていないが，一般に小さな群れをつくるオマキザル科のなかにあって，このサルだけは，ときに500頭を越える大きな集団をなすことがある。しかし，その内部構造は明らかにされていない。

〔注12〕 **ホエザルの喉頭嚢** 広鼻猿類のなかではとくによく発達しており，これが共鳴袋となって，かれらの声は数キロも届くという。この大きな喉頭嚢（こうとうのう）と並んで，巨大化した舌骨（雌のみ），非常に高くなった下あごの骨など，他の種には見られない特色をもつ。

〔注13〕 **夜行性** 原猿類では，多くの種が夜行性であり，それらの多くが単独生活者である。しかし，この真猿類中唯一の夜行性の種，ヨザルは集団生活を営んでいる。■ （伊谷純一郎）

サルの手相とヒトの手相

岩本光雄


ヒトの掌紋

ヒトの手相は，類人猿のものよりも，むしろふつうのサルに近いという。手相と進化とは，いったいどんな関係にあるのだろうか。

わたしどもはよく，はんこの持ち合わせがないときに拇印を押す。親指を使うのがふつうだが，実際には人さし指のほうが，個人差が出やすくて役だつはずである。ニホンザルのような場合には，親指であろうと人さし指であろうと個人差，いや個体差はほとんどない。だいたいが，手足のどの指をとってみても，みな似たりよったりの指紋だからである。ちょうど，タマネギを縦割りにしたときの切り口の模様に似ている。

皮膚隆線

指紋の一部を虫めがねでよくながめてみると，細長い隆起線が，たくさん並んで走っているのがわかる。これを皮膚隆線と呼ぶが，この皮膚隆線は，指の先で指紋を作っているだけではない。手のひら（掌）にも足のうらにもぎっしりと並んでいて，掌紋と足底紋を作っている。皮膚隆線の走り方は，生まれてから死ぬまでまったく変わらない。だから当然，指紋も掌紋も足底紋も，その模様は一生同じままである。たとえすり切れたとしても，やがてまた同じ模様ができあがってくる。

皮膚隆線は，霊長類，つまりサル類の進化に密接な関連をもっている。サル類の進化は，ネズミのような小動物が，木に登って生活することから始まった。地上での生活と違って，樹上では手足でしっかりと枝を握ることが必要である。皮膚隆線は，この握る必要性に応じて発達したものである。

1つには，皮膚隆線は，すべり止めの役を果たしている。ゴム手袋の表面をざらざらにしてあることがあるのを思いだせばいい。そこへもってきて，皮膚隆線のなかには，細かな触覚器がたくさん並んでいて，それらが隆線の受けるひずみを，鋭敏にキャッチするようになっているから，枝から枝へとび移ったようなとき，枝に触れたとたんに，手足を握りしめることができる。点字を読みこなすわたしどもの指先の敏感さも，もとをたどれば，樹上生活のなごりということになる。

厳密にいうと，皮膚隆線はサル類にだけでなく，それらしいものはコウモリネズミやキンカジューなど2，3の他の動物の手足にもみられるが，それぞれがいずれも木登りのじょうずな動物であるのがおもしろい。しかし，手足にまともに皮膚隆線が発達しているのは，なんといってもサル類の場合である。われわれヒトをもふくむ，数百種類にのぼるサル類のすべてが，手足に皮膚隆線をもっている。現生のサルの手足をみて，皮膚隆線がどの程度ひろがっていて，どんな模様の指紋や掌紋を作っているかを調べていくと，サル類のたどってきた進化のあらすじが浮かびあがってくる。

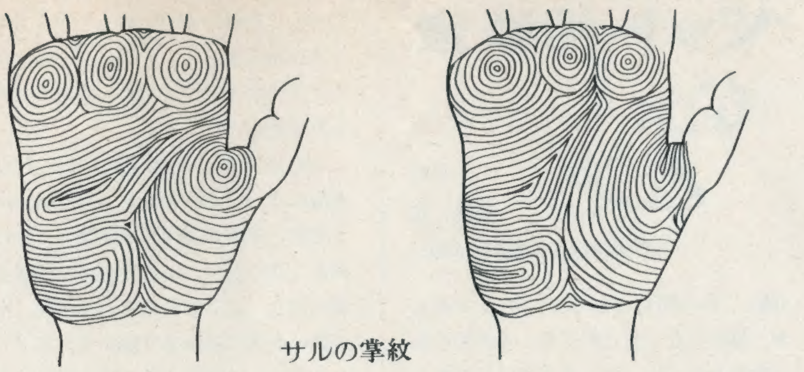
発達の頂点

霊長類をキツネザルなどの下等なサル，ニホンザルやヒヒなどのふつうのサル，チンパンジーやオランウータンなどの類人猿，そしてヒトの4つの系統に大分けしておいて，話を進めよう。また，ヒトの場合をのぞいては，手と足で似たようなことがいえるので，主として手のほうに話を限っておこう。

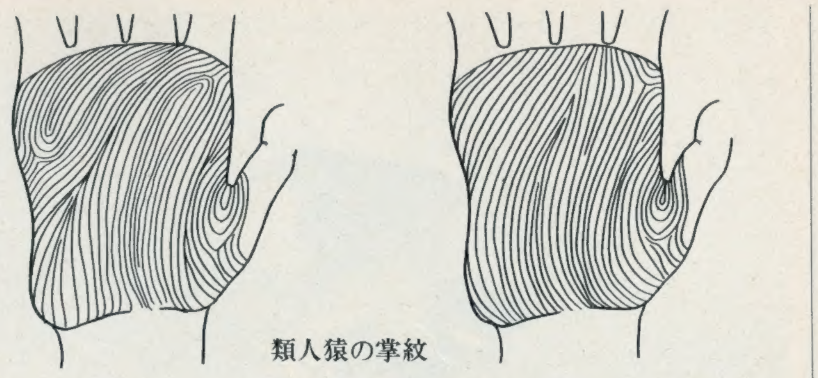
まず下等なサルの場合，指紋はどの指の場合にも，単純に隆線が並んでいるのがふつうで，あまり代わりばえがしない。手のひらにもちゃんと隆線はある。しかしこれも，手のひらのふくらんだ部


ハヌマンラングールの手形
8歳の雌


◀ ▼
シロマユテナガザルの手形と足形
3歳の雌



サルの掌紋



類人猿の掌紋

分にだけあることが多くて，全面にというわけにはいかない。イヌやネコの足のうらをみると，いくつもの盛り上がった部分が目につくが，この盛り上がりに相当する部分にだけ，隆線が発達していると思えばいい。こうして下等なサルは，指紋や掌紋の単純な点でも，サルからヒトへの進化の初期段階をとどめている。

ところが，もっと高等なふつうのサルでは，皮膚隆線は指先から手のひらまでの全面を埋めつくしている。指先ではたくさんの同心円の集まりみたいになって，最初に述べたような，タマネギの切り口に似た指紋を作っている。手のひらの模様，つまり掌紋はいくつものうずまきやループが巧妙に組み合わされてできていて，かなり複雑である。

指紋や掌紋の複雑さは，ふつうのサルの手足で，すでに発達の頂点に達しているといってもいい。それに相応するように，木から落ちればことわざになるほど，ふつうのサルは木登りがじょうずである。樹上生活のために発達した感覚の鋭敏なその手は，砂のなかからコメ粒をさえ拾いだすりっぱな道具としても活躍している。

ふたまた道

類人猿とヒトの場合の指紋は，どの指のものも同じというわけにはいかない。だからこそ，わたしどもは指紋をはんこ代わりに使えるわけで，大別すれば渦状紋（うずまき）と，蹄状紋（流れ）と，弓状紋（山型）とに分けられる。こうして，指紋は類人猿とヒトとがたがいに近いものどうしであること，そしてそろって，ふつうのサルとは少しようすの違ったところにきていることを教えてくれる。

ところが掌紋のほうは，類人猿とヒトとの間でまるで違っていて，両方が近いものどうしであることを物語るにはほど遠い。類人猿の手のひらをみると，ほとんどの隆線が縦に走っているために，掌紋ははなはだしく単純である。複雑な掌紋をもったふつうのサルの手と見くらべると，なんとなく間がぬけている。

これは，類人猿の手が，ふつうのサルの手よりもかえって無器用になってしまっていることと相応している。類人猿は樹上生活をするのに，手で枝をつかむというより，手を枝にひっかけるという生活が多い。親指以外の4本の指をそろえてかぎ型に曲げ，これを枝にひっかけてぶら下がる。両手を交互に枝にひっかけて樹間を渡るようすをさす「腕渡り」は，類人猿のためにわざわざ作られた術語である。腕渡りがうまくやれるように，親指だけをのけものにして，ほかの指がかなり長くなっており，手でものをつかむのがたいへん苦手になってしまっている。類人猿が器用だとすれば，それは手のせいではなくて，頭がいいせいである。

それにひきかえて，われわれヒトの手は，はるかにふつうのサルのおもかげをとどめているし，さまざまなヒトの掌紋のなかには，ふつうのサルにかなりよく似たものを見つけだすこともできる。類人猿のように特殊なわき道（腕渡り）にはいりこむことを避け，ふつうのサルの手を，基本的にもちつづけながら高級な知能を獲得してきたこと，そのあたりに人類成立の1つのかぎがふくまれているはずである。■

（京都大学霊長類研究所助教授）

サルの指紋や掌紋の研究者にとって，その手形は貴重な財産である。財産ともなると，その収集は容易ではない。

健康診断のために，獣医がサルに軽く麻酔をかけたときに便乗してとったものも少なくないが，オリ越しに握手をして，引っぱった手にインクを塗り，手形をちょうだいしたことも多い。閉じようとするサルの指を開きながら，その手の上に紙を重ねて，すばやく手形をとるのだ。なにしろ，動くはんこに紙を押しつける方式だから，その呼吸をまちがえたら，ずれただいなしの手形しかとれなかったり，紙がくちゃくちゃになったりする。

それでも握手方式はまだ楽なほうである。飼育技術員に助けてもらい，サルを押えつけながら夢中でとったようなときは，終わってほっと一息つくと，からだじゅうが大小便くさくてやりきれない始末。手八丁足八丁，クモザルのごときは尾八丁（ここにもなんと皮膚隆線がある）のかれらを相手に，苦心さんたんのすえやっと手形をとり終わったら，なんと同じ側を2度とってしまっていたというようなことも珍しくない。

左右の手形は
いずれも筆者がとったもので，原寸大です。



▲　▶
ニホンザルの手形と足形
ヤクシマザル　10歳の雌



ミサゴ　（アメリカ，エバグレーズ国立公園）

35ミリカメラ
レンズ　200ミリ
F5.6　1／250
エクタクロームXより反転

田中光常　動物写真のポイント　7．接近

風向きを考えろ

海鳥が，砂浜や岩の上に休んでいるところなどを見ると，まるでいい合わせたように同じ方向に頭を向け，きれいに並んでいることが多い。そしてなにかに驚いたときは，いっせいに風上の方向に飛び立っていく。これは風に向かって飛びあがったほうが，早く離陸できるからだ。

風の強い日には，海鳥にしても，陸鳥にしても，飛び立つ方向もわかりやすく，離陸するときもダイナミックに垂直に飛びあがってくれる。また，こんな日には滑空している速度も遅いので，撮影にはねらいやすい。

野生の哺乳（ほにゅう）類の場合は，鼻のすぐれたかれらのことだから，必ず風下より近づくことがたいせつである。カメラマンのにおいと，足音をキャッチされないためにも，ぜひ風の方向を知っておく必要がある。汗のにおいなどは，とくに禁物である。■

仲間のひろば

スズメの巣箱観察記

街路に面した2階の手すりに，スズメのためのえさ箱を設けた。スズメがやってくるまでには3か月たち，そのえさ箱から斜め上部，手の届く柱の巣箱に実際巣を営むようになるまでには，まるまる3年が過ぎた。

45年4月25日，朝から巣材を運び始める。待望の時がやってきたのだ。

28日，午後6時に1羽がはいったまま，ついに巣箱から出てこない。いよいよ明朝から産卵が始まり，5月2日あたりから抱卵か。

5月16日，出入りするスズメのくちばしに虫は見えないが，けはいから予想どおりひながかえったと確信。

19日，午後4時，はじめて親スズメのくちばしに虫が見え，すぐ下のえさ箱から粒えさも運びだす。

21日，2階の窓に耳をよせると，ひなの声がかすかに聞こえる。目が開きはじめるころだ。

22日，えさ箱に集まるスズメの数が目だって減る。親スズメが他のスズメを追っ払って寄せつけない。ひなが順調に育っている証拠であろう。

24日，ひなの声がチュリッチュリッと高く，街路の向こう側からでもじゅうぶん聞きとれる。虫一粒えさ一虫と，親鳥のもっとも忙しい時期。かりに2羽で3分おきに運ぶとして，1時間では20回。1日稼働12時間とすれば240回（多分最低回数）となる。

28日，えさを与える回数が若干減ってきたのは，大きな虫を食べさせうるほどにひなが成長したからに違いない。

29日，ひながはじめて姿を見せる。入口にのぞいた胸がふっくらと白い。声もチュンチュンと一人前。

30日，ひなは全部で3羽。1羽ずつ間をおいては巣立っていく。最後のひながえさをもらって親鳥のあとにつづいて飛び立ったのは午前9時であった。■

（広島県三次市・清原正人・55歳・商業）

原稿募集

☆読者の研究　☆動物ニュース　☆仲間のひろば　☆ペット相談室　☆動物写真

原稿の枚数は，いずれも原則として400字詰原稿用紙2枚以内

原稿には必ず住所，氏名，年齢，職業，電話番号をお書きください。

採用分には薄謝または記念品を進呈いたします。なお，お送りくださった原稿，写真はいっさいお返しいたしません。採否のお問い合わせにもお答えいたしかねますのでご了承ください。

送り先は，
東京都千代田区有楽町2-3（〒100）
朝日新聞東京本社
「世界動物百科」編集部
『私たちの仲間』係

ペット相談室



担当
杉浦　宏
（上野動物園水族館飼育係長）

〈問〉　冬の間じっとしていたキンギョが，暖かくなったこのごろ，人の影が池に映ると岸によってくるようになりました。そろそろえさをやらなくてはと思い，去年の秋までやっていたえさが残っていたので，それをやろうと思うのですが，何か月も放置しておいたえさでもだいじょうぶでしょうか。（東京都・中山輝雄）

〈答〉　なるべく新しいえさをやるようにしてください。古くなったえさでも，おなかのすいたキンギョはきっとよく食べるでしょう。しかし，そのえさの質が変化していたら，キンギョにとってよい結果をもたらしません。

人工飼料のなかにふくまれている脂肪（しぼう）が酸化していたり，カビがはえたりしたえさを与えていると，成長を阻害（そがい）するばかりか腸炎をおこしたり，浮き袋の調節がきかなくなって，からだが横になったり，ひっくりかえって泳ぐようになることがあります。

人工飼料は，近ごろでは質的にたいへんよいものが作られ，キンギョの成長ばかりでなく，色が美しくなるようにミネラルやビタミンなどをふくんだものがあり，天然飼料のイトミミズやアカボウフラなどとくらべて，決してひけをとらない品質のものがあります。

しかし，こうしたよいえさでも，日常の保管に気をつけないとたいへんなことになります。いつも乾燥した状態にしておくために，お菓子のなかに入れておく乾燥剤を利用するとよいでしょう。直射日光にさらすようなことは，えさを変化させるもとになるので，冷暗所に保管しておくことです。■

〈問〉　キンギョには，どのくらいの量のえさを与えるのがよいのですか。（京都市・井上　衛）

〈答〉　一般には魚の体重の3パーセントの量を与えるのがよいとされています。しかし，実際に家庭で飼うときにキンギョの体重を測って，その3パーセントのえさを与えるといっても容易なことではありません。

またキンギョは他の魚と同じように，水温によってえさを食べる量が変わってきます。水温が高ければ体温もそれに比例して高くなり，からだの新陳代謝（しんちんたいしゃ）も活発になり，えさもよく食べますが，水温が低いときにはあまり動かず，えさも食べません。このようなことを知っておいて，えさを与えるとよいでしょう。

成長期にある小さなキンギョには，1日2～3回に分けて10～15分ぐらいで食べつくす程度のえさを与えます。一人前になったキンギョには，1日1回でよいでしょう。イトミミズ，アカボウフラのような生き餌（え）があれば理想的ですが，信用あるメーカーのものであれば，人工飼料でもりっぱに育ちます。■

〈問〉　キンギョの病気について教えてください。（名古屋市・柴田治夫）

〈答〉　キンギョに限らず，魚の病気については最近いろいろ研究されていますが，まだまだわからないことだらけというのが現状です。したがって治療方法についても決定的なものがありません。

そこでキンギョを飼うとき，日常の管理にじゅうぶん気をつけ，病気にかからぬようにすることです。キンギョをいつも健康な状態にしておけば，10年あるいはそれ以上に長生きさせることも夢ではありません。

病気の感染経路として，新しくキンギョを買い入れたときや，水草を入れたときなどにとくに気をつけてください。また水温の上がり下がりが急にあったときなどは，からだの消耗（しょうもう）が激しく，弱ることがあります。こんなときには病源菌におかされやすいので，水温の急変を避け，よく注意しなければなりません。■

裏表紙説明

アヒルのひなと少年　哺乳類や鳥類には，生まれたばかりの赤ん坊が最初に出会った動物や人を母親だと思いこんでしまう性質がある。これをコンラート・ロレンツ博士は《刷り込み》と呼んだ。

博士はガンのひながかえったときから母親として接していた。ガンは博士をしたっていた。それでも冬が近づくと渡り鳥の例にもれず南へ去っていった。翌春，ヒナはりっぱなガンになって研究所の池にもどった。

この少年をアヒルが母のようにしたっていることがわかる。〝動物も，育ての親の恩を知る〟という心のつながりを，少年はこれから体験するのだ。■

PH. Mc KENZIE ATLAS-PHOTO

お知らせ　連載中の『野生動物こんにちは』『漢字のふるさと』を本号は休載します。

魔よけ獅子像

百獣の王の像を宮殿や墓陵に飾ることは東西を通じて盛んだった。その威厳と猛々しさによって，あるいは権勢の強さを象徴し，あるいは魔を退ける役割を負わせたのである。インドでは仏を守る聖獣として仏像の台座にあらわされ，中国では帝王の陵墓に侍した魁偉な姿を多くとどめている。日本へは仏教とともに伝えられ，朝鮮を経由したために「高麗犬」（狛犬）と呼ばれたが，これは獅子の実在しなかったわが国における特別の呼称である。古くは木彫で刻まれ，鎌倉時代からは宋の影響で石造が一般化し，焼き物でも作られた。東大寺南大門その他の多くの名作がある。しかし，沖縄の魔よけ獅子は，民家の屋根にどこでも見られた。作者は，屋根瓦を漆喰で塗り固める左官であって，彫刻の技に秀でた作家ではなかったのだが，その表現は千変万化，なまなかの彫刻家の及ばぬ豊かな創造力を示している。首里城の石彫の獅子は，格調正しい名石匠の手になったものだったが，民家の屋根の漆喰の獅子は，民衆の天衣無縫な土俗性を如実に反映した，無名左官たちの驚くべき造型群であった。現在でもその製作はなお続いているところがある。

写真の一体も久米島の民家の屋根が戴いていた獅子であって，瓦を骨組として漆喰で塗り固めた像である。凄愴なまでにきびしい表情と，逞しい活力を漲らせた姿態は，鎌倉の名作以上の感銘を与える。雨にぬれて屋上に睥睨するさまはことにすばらしかったであろう。■　（水尾比呂志）



魔よけ獅子像（沖縄）　漆喰　高さ43センチ　倉敷民芸館蔵

世界動物百科　通巻7号　昭和46年4月25日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



アヒルと少年　　説明 30ページ

雑誌コード　0634